

2020 年度 教育 研究 活動 報告 用 紙 (様式 9)

氏名	吉原 悦子	職名	講師	学位	修士 (看護学) 大分大学 2007 年
----	-------	----	----	----	----------------------

研 究 分 野	研究内容のキーワード
老年看護学	排泄ケア 認知症ケア 地域貢献活動 実習における学生の学び

研 究 課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症高齢者の排便ケア ・ 地域貢献活動に参加した学生の学び ・ 実習における学生の学び

担 当 授 業 科 目
(前期) <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域連携協働支援論 ・ 地域生活支援論 ・ 老年看護学演習 ・ 在宅看護学 ・ 在宅看護学演習 ・ 看護研究 ・ 高齢者支援学 I ・ 高齢者支援学 II (開講なし) (後期) <ul style="list-style-type: none"> ・ 老年看護方法論 ・ 看護学 (栄養学科) (通年) <ul style="list-style-type: none"> ・ 老年看護学実習 II ・ 看護総合演習 ・ 看護総合実習

授業を行う上で工夫した事項 (※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
授業科目名【地域連携協働支援論】 「地域で生活する人々」をキーワードとし、自らの生活に着眼するところから始めた。①自分自身のことと捉えられるように日常生活をイメージするような課題を提供し、具体例を挙げながら講義を行った。②講義に集中できるように講義の途中に個人ワークを取り入れた。③学生の自由な発想を妨げないように行った。④講義の中で地域・看護・認知症・高齢者・障害者などのキーワードでのトピックスなどを交えて提供し、幅広い視野を持てるように内容を工夫した。⑤遠隔講義であったが、提出された学生の課題を提示し、解説を行った。
授業科目名【地域生活支援論】 本科目は今年度開講の科目で「地域連携協働支援論」に続く科目である。地域で生活するあらゆるライフステージにある人々の健康を支えるための知識ケアを学ぶ。これまでに学んだ概論や方法論をベースに、保健・医療・福祉・教育などの領域の専門職との協働連携や包括的にケアする方法、その中においての

看護師の役割などを講義した。遠隔の講義であったためグループワークの時間の確保が難しく、学生個人の考えが偏ったり、課題に対して意義が見出しにくい学生もいるため、課題については解説を行い、コメントを返していった。講義の途中には、既習の科目であっても復習を含め講義を行った。

授業科目名【老年看護学演習】

本科目は今年度開講の科目である。概論・方法論をもとに演習を行った。今年度はすべて遠隔講義で行った。事例患者を用いて看護過程を行う際に、具体的な視点を学生に伝えていった。教員の模範解答ではなく、学生自身が記載したものを元に解説を行った。事例については2年次の方法論でも触れており、老年特有の疾患で、対象理解を進めていった。事例患者をイメージしながら看護実践が行えるように関連性を持たせ、技術演習を行った。遠隔講義であったため、パソコンやタブレットなど複数の機器を使い、教員がリアルに看護実践を行う様子を映像として映し、伝えていった。特に安全面やプライバシーの配慮、十分に気を付けることが望ましい場面については、繰り返し伝えた。

授業科目名【在宅看護学】

継続看護、地域包括ケアの部分を担当した。地域包括ケアは背景がさまざまであり、なぜ地域包括ケアが必要になったのかを制度を含めて解説した。これまで、概論や方法論で学んできたことを想起しながら、講義を行った。また、病院、在宅など切れ目のない看護を提供することをイメージ付けるためにも具体例を挙げながら、病院から在宅、在宅から病院での継続の方法や関連職種などを含めた連携を伝えた。特に学生は、これまで学んだ内容等を想起しながら講義を聞くことが難しく、「習ったか」「この用語は聞いたことがあるのか」など、確認をしながら、講義を進めた。国家試験にも出題される分野であるため、知識の定着を意識し繰り返し伝えた。また、今回は遠隔講義であったため、例年よりはゆっくりと進めた。

授業科目名【在宅看護学演習】

在宅看護学を踏まえながら、演習を行っていった。特に看護過程では在宅の特徴を踏まえることができるように指導を行った。特に自己課題が進まない学生については、担当教員で個別に指導を行った。在宅看護では、看護師だけでなく、多職種と連携する必要や家族への視点も重要であり、意識して伝えるようにしていった。疾患を治療することだけでなく患者さん本人と家族の可能な限り望ましい生活に近づけるための援助を伝えていった。

授業科目名【看護研究】

本講義は5名の教員で担当した。研究の基本となる講義とグループワークで構成している。研究計画書の作成から簡易的な調査を実施し、抄録を作成し、発表する一連の流れを行っている。初めて行う作業であり、学生はイメージがつかず、グループワークを行っていることが多いため、具体的にどう進めていくのか考え方を説明した。今回は特にオンラインでのグループワークを行ったため、学生の困りごとには耳を傾け、修正を行った。

授業科目名【看護総合演習・実習】

今年度は7人の学生を担当した。看護総合演習・実習については、関心のある分野の論文を読み、ゼミのメンバーと意見交換を行った。しかし、今年度は、遠隔での実施となったため、実習につながる演習といった位置づけは厳しく、なかなか深まりを持つことは難しかった。さらに、前半は実習を行うための実習計画から文献検討に切り替えたことや、図書館の利用ができない時期があったため、文献検索を一緒に行った。そのうえで、遠隔でのディスカッションであったため、効果的には進まなかったがそれぞれの興味を持った内容について各学生がプレゼンテーションを行ったりしながら共通理解を深めていった。

今年度は、実習として臨地に出向くことはできなかった。しかし、これまで行ってきた実習を振り返ることを心掛け、そこから学びを深めた。さらに、看護職としての展望を持つためにもオンラインで開催されている研修会や講演会に参加を促し、発表を行うことで共通の学びとした。また、総合演習・実習の報告会において、プレゼンテーションを行い、学生たちのまとめたレポートの有意義な振り返りとなった。

総合演習・実習は、これまでとは異なり、自ら興味のあるテーマを絞り込み、実習の計画を立ててその成果を自身が枠組みを作成し、レポートを書くというものである。就職活動や国家試験の学習も並行して行う時期であり、計画を立てて遂行するという点では、今後つながるものであると考えられる。

授業科目名【老年看護学方法論】

高齢者のリハビリテーション、認知症、高齢者に起こりやすい症状とケアについて担当した。基本的な疾患や症状はすでに学んでいるため、高齢者では特に気を付けるべきことについて具体的な実習場面を盛り込み、講義を行った。特に認知力の低下した高齢者については一般的ななかかわりの原則は理解しているが、

実習中のエピソードなどを取り入れることで、具体的な場面をイメージしながら講義を聞くことができた。また、認知症の講義のあとに認知症サポーター養成講座も受講したこともあり、関心をもって講義に取り組むことができたと言える。

また、講義ごとに質問や学びの意見を収集し、次の講義で解決し、さらに追加の解説を行っていった。

授業科目名【老年看護学実習Ⅱ】

4年生前期についての実習では、初めての遠隔実習であった。その中でいかに療養者の全体像を捉えられるのかは難しい状況ではあったが、教員の施設への立ち入りを許可していただき、オンラインで療養者と学生をつなぎコミュニケーションを行った。難聴や認知力の低下がありオンラインでのコミュニケーションは難渋したが、パソコンやスピーカーなどを使用し、出来るだけ直接やり取りができるようにおこなった。認知力が低下している高齢者とのかわりになるため、言語だけを聞くのではなく、その人の持つ背景を鑑み、受け持ち療養者さんのメッセージをくみ取るように指導した。

授業科目名【看護学（栄養学科）】

栄養学科の学生でもなじみのある、また、今後必要となる疾患を取り上げた。3、4年生であるため、ある程度の知識はあると考えたが、その都度、用語の確認などを行い、講義を進めていった。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等（任期）	加入時期
日本看護学教育学会		2001.4～現在に至る
日本老年看護学会		2003.4～現在に至る
日本老年社会科学会		2003.4～現在に至る
日本認知症ケア学会		2006.4～現在に至る
日本看護科学学会		2008.6～現在に至る
公益社団法人「認知症の人と家族の会」		2016.5～現在に至る

2020年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文) 老年看護学実習においてライフストーリーを聞くことによる学生の学習効果	共著	2021年3月	西南女学院大学紀要 Vo125	①老年看護学実習において課せられた「ライフストーリーを高齢者が語る意義、援助者が聞く意義」について学生が記述した記録を分析し、学生の学びを明らかにすることを目的とした。高齢者が語る意義では、人に話すことで人生を振り返り、大変だった人生を思い出し、学生に話すことを楽しみにしていた。援助者が聞く意義としては、ライフストーリーの中で語られるその人の価値観を聞くことでその人に会った援助につながると考えていた。語られた内容から単に高齢者を

2020年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ある末期がん患者の経験から考える意思決定支援のあり方	共著	2021年3月	西南女学院大学紀要 Vol25	<p>理解しようとするだけでなく、非言語的なものをキャッチし、意味を読み取ろうとしており、高齢者との相互作用の中で学んでいた。</p> <p>②吉原悦子、丸山泰子、金子由里、溝部昌子</p> <p>③pp13-21</p> <p>①がん患者の語りをまとめた事例報告である。対象は60歳代男性で、胃がんの末期患者であった。ギアチェンジ期の前後において、療養中の出来事と、経験の意味を明らかにすることを目的とした。対象の語りから8つの出来事と20の経験が抽出された。</p> <p>②共著者：石井美紀代、水原美地、中山昌美、吉原悦子、鹿毛美香</p> <p>③pp23-32</p>
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究

研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
看護師による POCUS 活用に関する研究— DVT 予防対策と安全なケアへの効果—	文部科学省科学研究費	代表：溝部昌子 研究分担者	研究分担者 60,000 円

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(2) 個人研究

研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考

社 会 に お け る 活 動 等

団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 間 等

学 内 に お け る 活 動 等 (役職、委員、学生支援など)

・ 情報システム管理運用委員	2020.4～2021.3
・ 地域連携室員	2020.4～2021.3
・ 学生募集関連 (ブログ担当)	2020.4～2021.3
・ キャンパスハラスメント相談員	2020.4～2021.3
・ 看護学科1年生アドバイザー	2020.4～2021.3